

グローバル交易と『間違いの喜劇』

勝 山 貴 之

I. 作品の舞台

シェイクスピアが『間違いの喜劇 (*The Comedy of Errors*)』の執筆にあたって、プラウトゥス (Plautus) の『二人のメナエクス (*Menaechmi*)』を材源としたことはよく知られている。材源『二人のメナエクス』の中の双子と召使いは自分たちの旅の行程を次のように語っている。「六年という歳月にわたって放浪を続けてきました、イストリア、ヒスパニア、マッシリア、イリリア、それに地中海沿岸、ギリシャ各地、イタリアのすべての港町を訪ねました。」¹ 台詞に言及されている地名「イストリア」は現代のクロアチアを、「ヒスパニア」はイベリア半島を、そして「マッシリア」は地中海北西部のスペインとイタリアの間の海岸地域を指し、更に「イリリア」はアドリア海東海岸の地域を言う (図1参照)。

これに対して、シェイクスピア劇のイジーオン (Egeon) は、「遠くギリシャにて五度の夏を過ごし、アジアとの国境を隈無く巡り、海辺の道を辿って帰国しようとしたところです」² と語り、そこにスペインやイタリアへの言及は見られない。シェイクスピアは『間違いの喜劇』の執筆にあたって、材源とは異なるヘレニズム文明ギリシャとその東方、すなわちオスマン・トルコ帝国を思い描いていることがわかる。

オスマン・トルコ帝国は、13世紀後半アナトリア西部に起源を發し、まず1326年にブルサを征服。ゆっくと西進しながら、現在のブルガリア、マケドニア、そしてギリシャの大半を征服し、1389年にコソヴォの戦いでセルビア帝国を撃破して、バルカン半島をその支配下におさめた。やがて

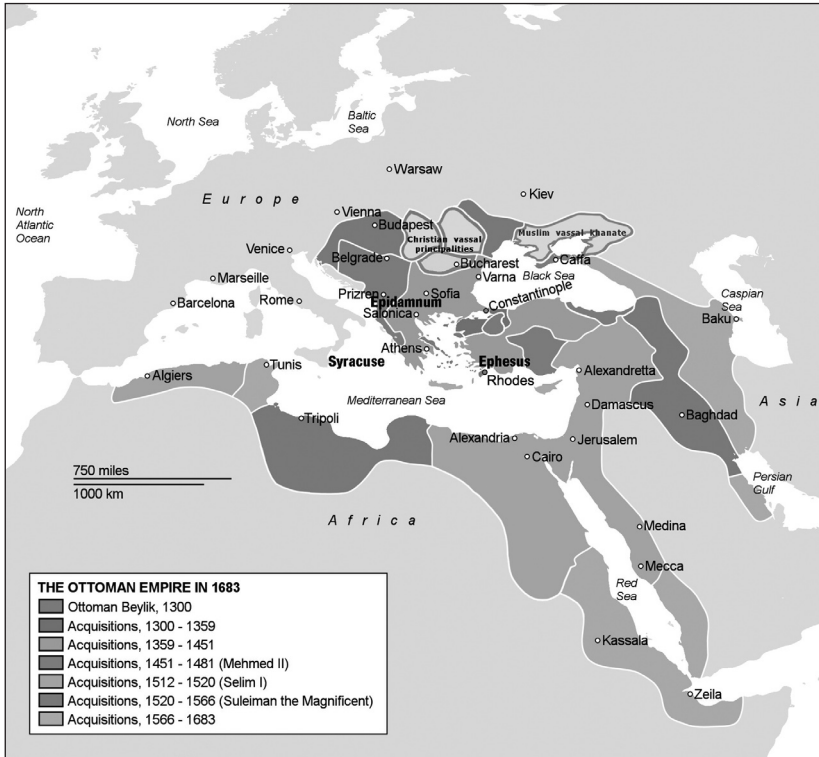


(図1)

1453年にはコンスタンティノープルを陥落させて、ビザンツ帝国を滅亡へと追いやっている (Lapidus 373-74)。したがって16世紀のギリシャは既に200年に渡って、オスマン・トルコ帝国の支配に甘んじていた。マイケル・ドレイトン (Michael Drayton) は、「無学なトルコ人が、そして粗暴なバーバリー人が、かつてホメロスが崇高な『イリアッド』を詠った地で商いをする」 (Drayton 207-08)³と、気高き文明の地であったギリシャが、オスマン・トルコ帝国をはじめとするイスラム教徒の交易の場と成り果てていることを嘆いている。東地中海において、自国の交易の拡大を目論むオスマン・トルコ帝国は、キリスト教世界と激しい攻防を繰り返しながら、近隣諸国を次々と自らの帝国支配の中に組み込んでいったのである。

さて、プラウトゥスの材源の舞台が、マケドニアのアドリア海沿岸の都市エピダムナム (Epidamnum) であるのに対して、シェイクスピアの『間違

いの喜劇』の舞台は、小アジア西部エフェソス（Ephesus）である。シェイクスピアは舞台を、よりトルコ支配の色濃い小アジアに移している（図2参照）。オルテリウス（Ortelius）編纂による地図帳を繙けば、そこにはエフェソスを「エーゲ海沿岸のイオニア地方にある古の都市で、現在はトルコとなっている」⁴と記した解説が見受けられるように、この公国もトルコ領となり、異教国との交易の盛んなことで知られる国となっていた（McJannet 88）。そればかりか、劇の中には異教国への言及が繰り返し挿入されている。エフェソスのアンティフォラス（Antipholus E）の家にあるという「トルコの掛け布（“Turkish tapestry”）」（IV. i.104）。更に、商人が「ペルシャへ



(図2)

向かう船に乗る」(IV. i.4)⁵ ことなどへの言及ともあいまって、劇では舞台となるエフェソスが東洋との交易の重要な拠点であることが強調されているのである。

しかしこのエフェソスの地は、「ヨハネの黙示録 (Revelation)」(2.1-7) で言及される初期キリスト教宣教の七つの地のひとつでもある。⁶ この国はかつて聖パウロ (St. Paul) が宣教活動を繰り広げた地であり、彼が二年の歳月をかけて異教徒の改宗にあたった地であったことから、キリスト教布教の礎とされた地域でもあった (Degenhardt 41)。劇中にも、キリスト教への言及は多い。キリスト教圏シラキウスからこの地を訪れたアンティフォラス (Antipholus S) は「いいか、俺はキリスト教徒なんだからな、ちゃんと答えろ」(I. ii.77)⁷ と、自分がキリスト教徒であると口にするし、シラキウスのドロミーオ (Dromio S) は、「ああロザリオがあれば、罪人として十字架を切って祈るところだ (O for my beads! I cross me for a sinner.)」(II. ii.188) と、カトリック信仰に言及する。またアンティフォラス E に取り憑いた悪霊を懲らしめようとするピンチ (Doctor Pinch) は、「この男に取り憑いたサタンめ」(IV. iv. 54)⁸ と悪魔に呼びかけ、カトリック教の悪魔払いをおこなおうとしている。そして何より、修道院への言及や修道院長の登場はカトリック世界の存続を伝えるものである。シェイクスピアは、オスマン帝国の支配の色濃いエフェソスを舞台にししながら、そこにキリスト教的要素を加えて、東西勢力がぶつかり合う複雑な地域を創出していることがわかる。オスマン・トルコ帝国の支配層は、侵略した地域の人々に比較的寛容であったと言われ、キリスト教徒たちは、征服以前の共同体組織や制度をそのまま維持することを許された。貢納義務を果たせば、信仰の維持を含む従来の慣習を守ることも黙認されたという (Lapidus 385-86)。したがってオスマン・トルコの領土内でありながら、修道院が存続していることにも納得がいく。

それでは、果たしてシェイクスピアは、どのような構想をもって、この地

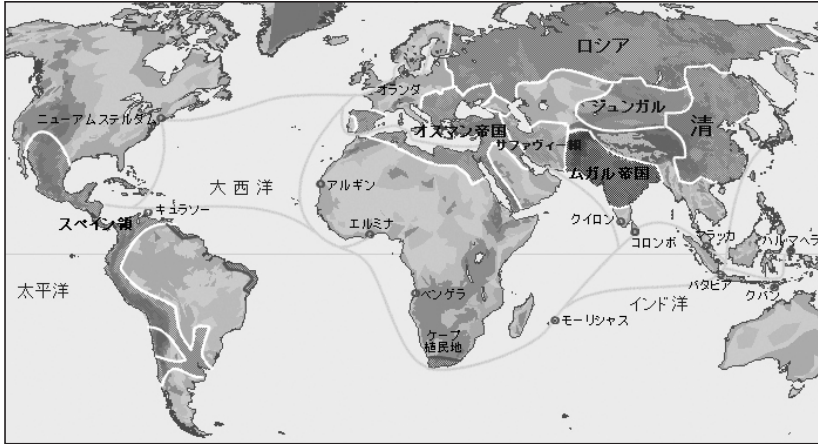
理的な改変をおこなったのであろうか。この小論では、シェイクスピアによる材源改変の意図について考えてみたい。

Ⅱ. グローバル交易と英国

シェイクスピアがオスマン・トルコ帝国支配下のエフェソスを舞台にしたのは、イスラム教国オスマン・トルコ帝国との交易をとおして、キリスト教社会がグローバル交易という時代の潮流に呑まれていくことを、観客に予感させるためであったのかもしれない。オスマン・トルコ帝国は、西はキリスト教国と、東はサファヴィー朝ペルシャ帝国と接し、東地中海の制海権を握る大帝国であった。ペルシャ帝国の更に東には、中国を中心として、南方のインドや東南アジア諸国へと広がる巨大なアジア経済市場があった。そこでは、胡椒、絹、藍、木綿、磁器、鉱物資源、穀物を中心とした品々の交易が盛んに行われていた。ちなみに16世紀の日本も、自国で産出される金、銀、銅、樟腦、鉄、漆などを中国や東南アジアに輸出し、中国産の絹やインド産の綿織物などを輸入することで、巨大アジア市場に参入していたことが知られている (Frank 78-117)。

東洋の国々から輸出される品物がヨーロッパへ運ばれる際に通らねばならないのが、ペルシャ帝国であり、オスマン帝国であった。東洋の主な輸出品を買い付けるため、西洋諸国は、先を争って東洋との交易路を確保しようとし、その対価は金や銀で支払われた。特に、新大陸で発掘される銀は、グローバル交易の発展に重要な役割を果たすこととなった。銀は、メキシコおよびカリブ諸島から、あるいはブラジルから、西ヨーロッパに持ち込まれ、そこから地中海を通して、更に陸路または紅海を経由し、アジアに流れたのである。西洋が香辛料の取引をもって、自分たちの経済圏にアジアを取り込んだとする考えは誤りであり、むしろ東洋の築いた巨大な経済圏に、ヨーロッパは参入したのである。仮に新大陸で金や銀が採掘されなかったとした

ら、ヨーロッパはグローバル交易に参入することすら難しかったであろう (Frank 74-75) (図3参照)。



(図3)

当時の英国社会が、経済の活況と共に変質していく様子は、時代を生きた人々の証言の中にも辿ることができる。巨大なグローバル交易が各国の経済に重要な意味を持つようになるなか、1581年に英国では、外交官であり議員も務めたトマス・スミス (Thomas Smith) の著書『英国領の自治国家に関する論説 (*Discourse of the Commonwealth of This Realm of England*)』が出版された。著書の中でスミスは、金・銀を基準通貨とする考えを放棄した場合、英国が他国との市場競争に敗北することになると断言する。

But and yf we should caste awaie oure tooles and weapons, and not other nations that be aboute, we should make oure selves naked of all defence, and be subiecte to their spoyle; so yf we alone should caste awaye oure gold and siluer, because of the harme that comes, not of them but of the evell vsinge, and other countries should retayne them still, we should weaken oure

selues and strengthen them muche. (Smith 115)

まさに金・銀を基準通貨とするグローバル経済の潮流に、国も人も巻き込まれていくことを余儀なくされると、スミスは予言している。

ローマ法王やスペインなどのカトリック勢力を避けて、東地中海に君臨するイスラム教オスマン・トルコ帝国との交易をエリザベス女王が模索したのは、自国の経済的発展を賭けての苦肉の策であった。エリザベスの密命を受け、コンスタンチノーブルに向かったウィリアム・ハーボーン (William Harborne) は、1578年にオスマン帝国政府から通商条約を取り付けることに成功する。報せを受けて、エリザベスもイングランドのトルコ会社に勅令を与え、両国の間で通商が正式に開始された。オスマン・トルコ側は、カトリック勢力の裏をかいて、イングランドから武器、火薬、硝石、錫、鉛などを輸入することを目論んでおり、イングランド側は、他国の介入なく帝国から、直接、絹や香料を輸入することを見込んでいた。両国における通商条約の締結は、双方に益をもたらすと思われたのである。オスマン帝国との交易は順調に発展し、やがてイングランドでは、1592年に「ヴェニス会社」と「トルコ会社」が統合され「レヴァント会社」へと名前を変えて、一層活発な商取引が展開されるようになった (Vitkus, “Common Market” 24-25)。キリスト教英国は、あえて信仰の異なるイスラム教国と組することによって、グローバル交易参入への道を開いたのである。

Ⅲ. 時代精神と作品

シェイクスピア作『間違いの喜劇』は、1594年12月28日に法曹学院 (Gray's Inn) で上演された記録が残されているが、創作されたのは、もう少し早い時期の1589年から94年頃にかけてではないかと推測されている (Henning 280)。作品はイングランド経済の転換期を捉えて、こうした時代

の空気を存分に孕んでおり、作品の中には金銭に関する話題が頻繁に取り沙汰される。劇の冒頭から、エフェソスの公爵ソライナス (Solinus) は、シラキュースの商人イジーオンに、通商条約に違犯したかどで死刑を言い渡す。身代金は1000マルク、猶予は一日である。

Duke. . . .

Again: if any Syracusian born

Come to the bay of Ephesus, he dies,

His goods confiscate to the Duke's dispose,

Unless a thousand marks be levied

To quit the penalty and to ransom him. (I. i. 18-22)

身代金という名で人の命を売り買いするというこのエピソードをはじめ、エフェソスではあらゆる物が取引の対象とされて、金銭でその価値が判断される。物の値段はしばしば舞台上の台詞の中で言及され、娼婦がアンティフォラス E に渡した指輪は「40 ダカット」(IV. iii.83)、アンティフォラス E が注文した首飾りは「200 ダカット」(IV. iv.134) だという。挙げ句の果てには禿頭の髪の毛でさえ、金銭で買い戻せないのかと、アンティフォラス S は口にする。

S. Dro. There's no time for a man to recover his hair that grows bald by nature.

S. Ant. May he not do it by fine and recovery?

S. Dro. Yes, to pay a fine for a periwig, and recover the lost hair of another man. (II. ii. 72-76)

あらゆる物に値段がつけられ、金銭を払えば、手に入らない物はない。すべ

では金で解決できる世の中で、まさにエフェソスのドロミオ (Dromio E) が言うように、何を尋ねても答えは「金だ」, 「金」という台詞ばかりが返ってくるご時世なのかもしれない。

When I desir'd him to come home to dinner,
 He ask'd me for a [thousand] marks in gold:
 "'Tis dinner-time," quoth I: "My gold!" quoth he.
 "Your meat doth burn," quoth I: "My gold!" quoth he.
 "Will you come home?" quoth I: "My gold!" quoth he;
 "Where is the thousand marks I gave thee, villain?"
 "The pig," quoth I, "is burn'd": "My gold!" quoth he. (II. i. 60-66)

人々は口を開けば「金」という言葉を発しながら、商人たちは商取引に勤しみ、「取引所 ("mart")」での取引に明け暮れるのである。

このように経済活動の盛んなエフェソスでは、「愛情」, 「信用」, 「責任」といった人と人との結びつきも金銭の多寡によって決められる。ルシアーナ (Luciana) は、姉に対するアンティフォラス E の冷たさを責めて言う。

If you did wed my sister for her wealth,
 Then for her wealth's sake use her with more kindness:

(III. ii. 5-6)

アンティフォラス E がエイドリアーナ (Adriana) との結婚を考える際に、彼女の財産を勘定に入れるのは、あたかも当然のことであるかのような発言である。そして台詞に表わされる通り、「愛情 ("kindness")」もまた金銭の多寡で演出できるものであるかのようにすら思われる。

また金細工師のアンジェロ (Angelo) は、自分がどれほどアンティフォ

ラス E を信頼しているかを言い表すのに、「信用 (“credit”）」の度合いを「全財産をお貸してもいいくらいです」(V. i. 8) と表現する。

Ang. Of very reverend reputation, sir,
Of credit infinite, highly belov'd,
Second to none that lives here in the city:
His word might bear my wealth at any time. (V. i. 5-8)

16・17 世紀の商人社会において、「信用」は何より大切なものであった。「信用」は名声を築き、名声があればそれが保証となって、一層多くの商取引が持ち込まれた。名声は、ともすれば資本以上に重視され、信頼できる相手であれば、自らの全資本金を融通することもしばしばであった。劇の中では、「信用貸し (つけ)」にまつわる台詞が繰り返し口にされる。また、アンティフォラス E は、金銭にまつわることで自分の名声に傷がつくことを恐れており、同じくアンジェロも金銭の取引で失態を演ずることは、自らの「信用」に関わることだと憤る。商人たちにとっては、「信用」を失うことはまさに身の破滅を意味するのである。

「信用」が大切なのは、商人の間ばかりではない。警吏もまた、自らの「信用」や「責任」を金銭の額として考えている。支払いの不履行を理由に相手を逮捕してもらおうと警吏を呼べば、手数料を支払い (IV. i. 76)、警吏は逮捕者を捕り逃がせば、その借金は自分の身に降りかかると不平を言う。

Off. He is my prisoner; if I let him go,
The debt he owes will be requir'd of me. (IV. iv. 117-18)

逮捕者を逃亡させた警吏は、職務上の失態のために処罰を受けるのではなく、逃亡者が背負っていた借財を肩代わりさせられるのである。「信用」や

「責任」は、常に金銭によって償われなければならない。まさに社会慣習や信頼関係はすべて金銭を還流させることによって、維持されていると言ってもよいであろう。

こうした社会においては、人生における不幸も貿易船の難破を喩えに語られる。尼僧院長は、人が正気を失う原因を喩えて次のように語っている。

Abb. Hath he not lost much wealth by wreck of sea?
 Buried some dear friend? Hath not else his eye
 Stray'd his affection in unlawful love--
 A sin prevailing much in youthful men,
 Who give their eyes the liberty of gazing?
 Which of these sorrows is he subject to? (V. i. 49-54)

「大切な友人を弔うことや、不義の恋の苦しみ」といった人間の魂にとっての喪失感や情熱も、「船が沈み、船荷もろとも財産をなくしたのでは」という台詞と併置されているように、金銭の喪失と同等に扱われ、経済的価値の指標の上で判断される。人生の不幸を列挙するなら、友人との離別や恋愛感情の煩悶などによる不幸よりも、船荷を失うことによる経済的損失こそが、人生最大の不幸として挙げられるものなのかもしれない。

そればかりか、「時」もまた金銭的価値で測られる。金銭をあらゆる価値に優先させる社会にふさわしく、シラキュースのドロミーオ (Dromio S) も時間の混乱を喩えて、「時」は「破産している」とエイドリアーナに語る。

Adr. As if Time were in debt! How fondly dost thou
 reason!
S. Dro. Time is a very bankrout and owes more than he's
 worth to season.

Nay, he's a thief too: have you not heard men say,
 That Time comes stealing on by night and day?
 If ['a] be in debt and theft, and a sergeant in the way,
 Hath he not reason to turn back an hour in a day? (IV. ii. 57-62)

ドローミオ S の時間に関する比喩はふざけたものであるが、当時の社会において時間という概念は、商取引において非常に重要な意味をもっていた (Cook 56)。劇中、アンジェロが5時に首飾りの代金をもらおうと語るように、取引には常に時間が指定される。商人たちの世界では、支払い金額と定められた時間が、取引の条件である。「時」の観念もまた、経済と深く結びついていることは否めない。ルシアーナが「男の人は自由の主人だけど、男の主人は時なのよ」(I. ii.8-9)⁹ というのも、そうした商人の世界の価値観に言及したもののなのである。

IV. キリスト教の倫理観の回復

エフェソスの世界では、あらゆる物が商品となり、人の信用や愛情までもが金銭で推し量られ、挙げ句の果てには時間までもが、経済によって支配されているといえる。劇の中では、繰り返し、取引や契約が話題にのぼり、金額と支払い期限が示される。金や金貨にまつわる台詞は実に30回におよび、物ばかりか人の命も経済上の取り決めである契約の対象となることを描き出す。すべてにおいて、道徳律や倫理観よりも、取引や契約が優先され、物事の表面的な「交換」という「取り違え」を生じさせることとなる。二組の双子の「取り違え」は、まさにこの取引における「交換」の象徴的な形なのである。

しかし劇の最後は、イジーオンと尼僧院長となっていた妻のエミリア (Emilia) が出逢い、双子の息子アンティフォラスと双子の召使いが一同に

集う。嵐にあって遭難した後、生き別れとなっていた家族は、長い年月の末、ようやく再会を果たす。歓喜に沸き上がる人々の姿を前に、キリスト教社会であるシラキュースからやってきたアンティフォラスは、父の身代金を喜んで払うという。彼にとっては、親子という血の繋がりのためであれば、金銭など惜しくはない。キリスト教の倫理観において、人間関係は経済の上に成り立っているものではないからである。公爵も離ればなれとなっていた家族の再会を賞でて、身代金を取ることをやめ、イジーオンに恩赦を与える。「おまえの父の命は取らぬ。」(V.i.291)¹⁰ この時、公爵ははじめてエフェソスの法を自ら曲げて、慈悲の情を示すこととなる。公爵の恩赦は、取引と契約によってのみ支配されているかのように見える東洋の地に、かつてこの地で栄えたキリスト教的慈悲の精神を取り戻し、劇は、金銭に縛られることのない人間の絆の回復という、一条の光を示して終わるのである。

ここにこそ、シェイクスピアが小アジアのエフェソスを、作品の舞台とした理由があったように思える。エフェソスは、聖パウロが宣教活動を繰り広げた、初期キリスト教宣教の七つの地のひとつであったにもかかわらず、そこではオスマン・トルコの拝金主義がまかり通っていた。それはキリスト教世界が、グローバル交易に参入する中で、イスラム教世界の価値観に呑み込まれつつあることを象徴的に表す事柄であった。商業利益を重んじようとする時代の中で、キリスト教の博愛主義は蔑ろにされ、人々は私利私欲の追求に生きることを良しとしていたのである。しかしそうした商業第一を謳う時代の趨勢の中で、人々がともすれば忘れかけている価値観の回復を描くのに、このエフェソスの地は最適であったのかもしれない。そしてこの異国の地こそは、異教徒との交易に邁進していく英国の姿を、そして大都市ロンドンの様子を、彷彿とさせるものであったことも事実であろう。劇場の観客は、舞台上に描かれる、遠く離れた異国の地の出来事を目にしながら、自分たちの心象風景をそこに見出していたのかもしれない。

V. 結

劇の中では、繰り返し「取引所」への言及がなされる。当時、「取引所」はヴェニスやアントワープ、そしてコンスタンチノーブルに存在し、商取引の中心となっていた。英国では、1568年にアントワープの取引所 (the Nieuwe Beurs) に倣って、サー・トマス・グレシャム (Sir Thomas Gresham) 主導のもと「王立取引所 (The Royal Exchange)」が建てられている。建物の中庭には、様々な国々の商人が一同に集い、そこで商取引が行なわれた。商人たちの間では、商品の取引価格の交渉をはじめ、それぞれの国の国情などといった情報が盛んにやり取りされた。遠隔地との交易の場合、その国の政治・経済情勢が商品価格に影響するため、貿易相手国の政情などを知っておく必要があったからである。広場は、区画によってそれぞれの国の商人が集まっており、その国と交易をしたいと考える商人たちが、容易に商売相手を探し当てられるよう工夫されていた。「王立取引所」が建設されたことは、英国がグローバル交易に参加したことを物語る象徴的な出来事であったと言える (Howard 29-34)。

先に言及したトマス・スミスが予言したように、1580年代、各国の貿易競争は一層激化し、エリザベス女王は自国の更なる経済的發展を追求しようと、1592年1月、新たにレヴァント会社へ特許状を与えたのである。貿易商人協会 (Society of Merchant Adventurers) の事務局長 (Secretary) であったジョン・ホイラー (John Wheeler) の『商業論 (A Treatise of Commerce)』(1601) には、当時の熱を帯びた商取引の様子が書き記されている。

[T]he Prince with his subjects, the Maister with his seruants, one friend and acquaintance with another, the Captaine with his souldiers, the Husband with his wife, Women with and among themselues, and in a word, all the world choppeth and changeth,

runneth & raueth after Marts, Markets and Merchandising, so that all thinges come into Commerce, and passe into traffique (in a maner) in all times, and in all places: not onely that, which nature bringeth forth, as the fruits of the earth, the beasts and liuing creatures, with their spoiles, skinnes and cases, the metals, minerals and such like things, but further also, this man maketh merchandise of the workes of his owne hands, this man of another mans labour, one selleth words, another maketh t[r]affike of the skins & bloud of other men, yea there are some found so subtill and cunning merchants, that they perswade and induce men to suffer themselues to bee bought and sold.

(Wheeler 316-17)

まさにホイーラーのことばによれば、あらゆるものは商取引の中に巻き込まれ、値段の交渉次第で取引が成立する。何物もそこから逃れることはできず、人間ですら取引の対象となりうるという。ホイーラーの記したことが真実であるとすれば、作品に描かれたエフェソスは、ロンドンの写し画であったことは言うまでもない。

作品は、グローバル交易に参入することで並みいる貿易先進国と競い合い、頭角を現そうとする英国の野望と、急激な商業主義の到来に戸惑う民衆の不安と混乱を、喜劇の笑いの中に包み込んでいこうとしている。劇の最後は、キリスト教倫理観が復活することにより、人々の不安や混乱は笑いさざめきの中に消え去るように見えながらも、グローバル交易というあまりにも大きな潮流から逃れることは難しい。グローバル交易に呑み込まれ、そこに渦巻く経済倫理に否応なく押し流されていくイングランド人たちの不安と焦燥を、作品の中に垣間みることができるのである。

註

- 1 “. . . six yeares now have roamde about thus, *Istria, Hispania, Massylia, Ilyria,* all the upper sea, all high *Greece*, all Haven Towns in *Italy*,” Bullough 17.
- 2 “Five summers have I spent in furthest Greece, / Roaming clean through the bounds of Asia, / And coasting homeward, came to Ephesus:” I. i. 132-4. シェイクスピアの作品からの引用は、すべて *The Riverside Shakespeare* によるものとし、以降は、幕、場、行数のみを示すものとする。
- 3 “Th’ unlettered Turk, and rude Barbarian trades / Where Homer sang his lofty *Iliads*.”
- 4 “ancient city in Ionia on the Aegean coast, now modern Turkey.”
- 5 “I am bound / To Persia, . . . ”
- 6 “Vnto the Angel of the Church of Ephefus write, Thefe things faith he that holdeth the feué ftarres in his right hand, and walketh in the middes of the feuén golden candlestickes.” アジア州にある七つの宣教の地とは、エフェソ、スミルナ、ペルガモン、ティアティラ、サルデイス、フィラデルフィア、ラオディキア。
- 7 “Now, as I am a Christian, answer me.”
- 8 “Sathan, hous’d within this man.”
- 9 “A man is master of his liberty: Time is their master.”
- 10 “thy father hath his life.”

参考文献

- The Bible: Geneva Edition: 1st Printing, 1st Edition: 1560.* Lazarus Ministry P, 1998.
- Bullough, Geoffrey, editor. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*. Vol.1, Columbia UP, 1975.
- Cook, Harold J. *Matters of Exchange: Commerce, Medicine, and Science in the Dutch Golden Age*. Yale UP, 2007.
- Degenhardt, Jane Hwang. *Islamic Conversion and Christian Resistance on the Early Modern Stage*. Edinburgh UP, 2010.
- Drayton, Michael. *The Works of Michael Drayton*. Edited by J. William Hebel. Vol. 3, Basil Blackwell & Mott, 1962.
- Esposito, John L. *The Oxford History of Islam*. Oxford UP, 1999.
- Frank, Andre Gunder. *ReOrient: Global Economy in the Asian Age*. U of California P, 1998.

- Gillies, John, and Virginia Mason Vaughan, editors. *Playing the Globe: Genre and Geography in English Renaissance*. Fairleigh Dickinson UP, 1998.
- Hall, Jonathan. *Anxious Pleasures: Shakespearean Comedy and the Nation-State*. Associated UP, 1995.
- Harris, Jonathan Gil. *Sick Economies: Drama, Mercantilism, and Disease in Shakespeare's England*. U of Pennsylvania P, 2004.
- Henning, Standish, editor. *'The Comedy of Errors': A New Variorum Edition of Shakespeare*. MLA, 2011.
- Howard, Jean E. *Theater of a City: The Places of London Comedy, 1598-1642*. U of Pennsylvania P, 2007.
- Lapidus, Ira M. "Sultanates and Gunpowder Empires." Esposito, *The Oxford History of Islam*, pp. 347-95.
- McJannet, Linda. "Genre and Geography: The Eastern Mediterranean in *Pericles* and *The Comedy of Errors*." Gillies, pp. 86-106.
- Parker, Charles H. *Global Interactions in the Early Modern Age, 1400-1800*. Cambridge UP, 2010.
- Perry, Curtis. "Commerce, Community, and Nostalgia in *The Comedy of Errors*." Woodbridge, *Money and the Age of Shakespeare*, pp. 39-51.
- Raman, Shankar. "Making Time: Memory and Markets in *The Comedy of Errors*." *Shakespeare Quarterly*, vol. 56, no. 2, Summer, 2005, pp. 176-205.
- Sebek, Barbara, and Stephen Deng, editors. *Global Traffic: Discourses and Practices of Trade in English Literature and Culture from 1550 to 1700*. Palgrave Macmillan, 2008.
- Shakespeare, William. *The Riverside Shakespeare*. Edited by G. Blakemore Evans, 2nd ed., Houghton Mifflin Company, 1997.
- Smith, Thomas. *A Discourse of the Commonwealth of This Realm of England*. UP of Virginia, 1969.
- Vitkus, Daniel. "'The Common Market of All World': English Theater, the Global System, and the Ottoman Empire in the Early Modern Period." Sebek, pp. 19-37.
- . *Turning Turk: English Theater and the Multicultural Mediterranean, 1570-1630*. Palgrave Macmillan, 2003.
- Wheeler, John. *A Treatise of Commerce*. Edited by George Hotchkiss, New York UP, 1931.
- Woodbridge, Linda, editor. *Money and the Age of Shakespeare: Essays in New*

Economic Criticism. Palgrave Macmillan, 2003.

本論文は、科学研究費基盤研究(C)「シェイクスピア作品におけるグローバル経済の影響と物質文化への人々の関心」(課題番号:16K02471 代表:勝山貴之)の研究成果の一部である。